陳氏急摘方

ヤ 9
1182

軍中備要 救急摘方

天保癸丑冬新鐫

花蘭舎藏

95-9

目録

天日月星辰
[illegible]
[illegible]
敬[illegible]
[illegible]

[illegible]書

國ひとびとの
天押日命のこと
はみな屋山ゆ
かたをまもり孫大来れ
るものかつえ
死するをい

重ねて祝業をあたら
しくし額をかかげ
皆はそのかつひ
けむしをさる。世國はあまいて
ゝ人の真ゝうんをなし
もはまこと今年ゝ安ら

題[illegible]
世[illegible]の[illegible]跡[illegible]侘て醫師の
[illegible]東月[illegible]過[illegible]東わ[illegible]い[illegible]拜
[illegible]方佩[illegible]ぽ[illegible]ぽ[illegible]初[illegible]
[illegible]
[illegible]や[illegible]ふ[illegible]ら[illegible]む
[illegible]天押日命の[illegible]て[illegible]祝

[illegible]の所[illegible]ぽ[illegible]ぽ[illegible]真[illegible]ら振
地[illegible]年[illegible]ぽ[illegible]ぽ[illegible]思
[illegible]行[illegible]ゆ[illegible]頭[illegible]
[illegible]ぽ[illegible]荒[illegible]ぽ[illegible]ぽ[illegible]て[illegible]ま
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

目次

一書を著す主意の事
一火傷乃手當ゝ事
一鐵鉋の玉をとる事
一火彈ふく〳〵火傷をし〳〵手當の事
一毒烟ふ中りこゝを療ぢする事
一金創手あてのこと
一血留の藥ゝ
一金創乃心得のこと
一閉挫(くじき)の手當ゝ事

一打身あるく即死しるを救ふこと
一骨を折るときの手當の事
一暑氣ふ中りて閉絶をんとせし時の手當の事
一凍死するを救ふ心得の事
一溺死(オボレ)あるを救ふこころえのこと
一氣を養ふく歛(オス)を壓力を生ずる事
一藥方八首

以上

宗門改之印

救急摘方

文化甲子(コノエ)の頃水戸の原南陽ゞ嵜草といふ書を著(アラハシ)て
椿ふ上せしハ醫(イ)門の用意至く深切なるそのなりそのの
開卷ふ事あるときは人氣(ジンキ)を勢出て盛壯(セイサウ)の氣をやる
そのふれば大事は時ふ臨(ノゾ)くハ其身を慎(ツヽシ)こと第一
の忠(チウ)とそ〳〵といふ爲ゞ最(モツトモ)至當は說(セツ)なりけるゞげふ
やふの身を慎(ツヽシ)むも忠義と思ふ故なれゞ其勢の出る
ことも〳〵時の宜(ヨロシ)きふこのゝひく人ふ勝(スグレ)たる大功を
を立べきそのふれバなり さまゞ孫子ふもそのことを
論じて勇と怯(ツヨキ)とハ勢ふり強(ツヨキ)と弱(ヨワキ)とハ形也といひく

村上藩藩校

軍ハ之で其時の機會次第ニ強くも弱くもなることを論じたるなり故如何となれば凡兵士の氣の伸る時ハ之弱きものも化して強くなり屈するときハ之強きものも變じて弱くなる之ハ氣の伸て進むものを勢といひ張て敵を壓するを形といふ故ハ軍術ハ要とする所ハ唯ハ此の機會を失ハざるにあり此形勢を得んこと最第一のことなり之を得ざるときハ兵ハ如何ニ凶器なるとも止ることを得ざるなり故ハ再び軍術の本意を論じていはく義を爭ふて利を爭ハざるハ以て其義を明ふをむとなり故ハ人を

殺て人を安むぜば之ハ殺を殺て可なり戰を以て戰を止れば戰ハ可也とす示すなり此義を守ることを義兵といひ其の利を貪を貪兵といふ今義兵を以て貪兵を破ハ之ハ卵ハ擲ぐ如くなるべし我邦ハ太古より國土自然の天質にして義勇の心の萬國ハ冠たることハ異域ハ之を稱して怖ることなれども久き泰平の德澤ハ驕過て遊惰より其義勇の心を忘失ひたるが如くなりしも激きられくハ必發ることなきこと能ハ之の孫子がいへる勝者の戰ハ積たる水を深谷へ決注ぐごとき軍の形も圓き石

を高き山より轉墮うごとき戦の勢もおのづから勃起して大煩火攻をそのくさぐさにもとづき勇威を振ひて伸進ちんそのゝ多くるぐさハこゝを必然ることなるべし。さらばうれ速男の若武者なるの鳥銃火攻ふ損害を蒙奮撃突戦ふ創傷と受打撲閃挫をいくそもものなるのあらんとさふ将士隊長ちどまるくもこれを治なる術と知得て速ふ患厄を救得さとむこととふ人を愛なる志の一助なるあとれもひとちしようふそうふ原子ゞ作意ふなるひてさしあるる危急と療ゞべき方法を素人なるもゞちふ會得をらるゞさやう

ふ書記し藥物の節約ふして製し易くることのと撰出して一小冊とるしぬるもゞでゝゝと草野の微忠ふしていとゆる早の雨具なるゞし。

火傷の事

火術ふハ榴炮火瓶雷砲雷筒火櫃火船飛彈鉋なるの敵を刼なゝそのあるといるる屈り至く輕き火傷なるく皮膚も糜爛なるゞふいるらぬそのハ速ふその傷處ふ水を多く潅ゝくまバ痛忽寛緩とのなるゞども屈〻重さものふくその傷處もし手足ならバ速ふ燈油の中へたゞらく差こゝおくゞし。徳身ならバ酒樽の酒

を半分に分て樽の中へ身を没入て良久く漬居べし。さまでど酒ハ嘸べからず。もし糜爛甚しくして痛堪がたきことハ鶏蛋油を多く塗て裂木綿にて縛おくべし。（薬方におほく褁帘のことハおほくに記せり。）我邦の太古細螺のキサゴといふものを打砕てその生汁をとり蛤の生汁に合せて火傷に塗て治する神方あり。今も海邊の土人ハ蛤の生汁のよく火傷を治することをいへり。一説に古事記のキサ貝ハ蚶の赤貝と呼そのまへといへり。本文にキサ貝を岐佐宜とあるをもりつぶすことのやうなれども集めの字を焦の誤とすれバ赤貝を焼て粉にしたるといふもまたその理なきにあらず。この物もまた火傷に効あるべき品なればなり。いづれにもあれ本文に人乳を加ふることをいへるは最効あるところなれバ人乳を得らるべくハ蛤の生汁にこれを和して塗ことも最よし。（一説に合せてざるくにありするを人乳にことくたるまりともいへど人乳にもこの効あれバ暫くこれハ記しおくなり。）予嘗て馬の火傷にて毛ことごとくぬけ膚爛て悩そのに蛤の生汁に蒲黄の末を和して塗たりしに速に効を得さることありき。（これも古事記より思ひ得たる治法なり。）それハ人の病を治する藥ハ馬にもまた用ふべきことなればなり。海近きあたりにてさしあたる藥なきときにすゝこれらの

事も心得べきことなるべし。此ふ記しおきめるなり。

鐵鉋の玉をぬく事

或人の説ふ鳥銃ハ中り遠く存外ふ死傷少きこの也。大鉋ハたゞかけらのごとなり。遠町ハ象限規四十五度を高仰の限とて町ごとふ殷くの高仰あれども中りハ甚遠し。

案ずるふ鳥炮ハ西蕃ふ始まるとなり。烽火の製ハ周漢のむかしよりあり。司馬相如が傳ふ烽舉燧燔とあり。漢書の注ふ曰ハく薪を用ひるものなり。然るふ續日本紀元明天皇和銅五年の紀ふ河内國高安の烽と廢て始て高見の烽おゝび大和國春日の烽と置くべしと平城ふ通ずとみえ萬葉集六の巻の長歌ふ射駒山飛火が嶽ふ萩が枝をこゝとゝゝ古今集ふ春日野の飛火の野守いでゝこよとハ別ふ記しるすとゝろなり。今我邦ふて製する硝石と以て裝する火藥の配度ハ西蕃ふ比べるとゝろふ超るとゝろなきハ我邦ふ生ずる此物の性ハ邈ふ異邦ふ優まるものゝごと知べし。その事ハ予が續て刊行するゝ硝石製煉法ふこまごと論ずるものを讀て心得べし。

我邦ふて永禄天正の頃鳥銃を打合の中へ騎馬の勇士の馬を乗入て敵を追崩をしたゝふ常ふして珍らしゝ指矢の中へハ却て入ずして鳥銃の中へ思ひの外ふ入るものゝふりとなれどいつなるふ鍛ふきし鎧兜ゝも近く鳥銃の力強き丸を受て徹らぬ名器ハあるべしとも出もつまねばゝ誠忠より張出しで此身を衛護自然の盾ごとあるべしとまされど戎狄の劍首銃ハ彼が性怯且刀鎗の鋭利なるものあらざるゝ兵器ともでも造出をしたれバ便利なるやうふゝて實ふ拙き兵器なり。

故ふ我邦人の深入接戦ふハ古の劔首銃ハ忽切て両断となるべきものなるべし然らバ弓ハ深入接戦ふハ兜鎧ゝ必用の具なるこゝハいつまでもあらねど此氣の張出しゝるものふハ他を壓倒るゝ不可思議の力を生ずると以て矢鉋とも避て弓ゞ為ふ身を害ことゝなるものなり此事ハ後ふ詳べし この力あるゝを觀得しゝるゝ予ハ私ふ之を衛氣と名づけ さるゝをゝしこの氣の虚隙ありて敵の彈丸と受ることもあらバ頭面胸腹の急處いつまでもあらねど鳥銃の力弱くして肘臂股脛ゝの骨ふて丸の止りゝるゝ後ふ圖を出しゝる了頭螺旋鑽雙鈎鉋子鷲嘴

了頭螺旋鑽 タマヂ

鉛丸の骨ふ申りて止ることのを
ねぢこゝゝく引出そとゝろのものなり。

雙鈎鉋子 タマカキ

炮丸の肉の中ふ止りゝく出ゞゝきものを
ゝき出そとゝろの鉋子なり。

金創縫鐵

鷲嘴鑷子 タマスクヒ

丸の肉ゝ中ふありていゝふそれども
出ゝるゝとゝきふハこれをもちを出そ
なり。

この三種ハ紙上狹隘のゝふ圖もゝとゝろ其真ふゝる能と知べし。

狀さまゝあり急なゝ
ときに衣服
とめふものを
と火ふ燒
ゝゝて
用ひても

鑽子(ハサミ)などの具を豫(カネ)て用意し〻く速ふこまをと桃(カヂ)出す
べし。諸侯の醫師の軍ふ従ハしむるその人
必命してこれらの器を用意さしべし。その創口ハ灰汁ま
たは清水にて洗ひ。醋にて洗ふも愈創水と撒綿(ホウシモ)
絲ふ浸(ヒタシ)てこれを填(ツメ)め。魚膠膏または密陀僧膏を貼
て。後ふ木綿にてもつてこれを巻し。もし血出て止(ヤ)ざるこれふ
海綿(ウミワタ)と湯もしくハ水ふ浸(ヒタシ)てこれをあぶりて後これを
以て血をとるく拭(ヌグ)ひ。槲耳(ハウダケ)と以て蓋(オホ)ひ。醋を木綿ふ浸(ヒタシ)
てこれをあて。まくべし。内服劑ふ松葉の黒焼と細
末して酒にて用ふ。妙ふ鏃(ヤジリ)の肉ま入り。及ひ鐵丸(ラウボウダマ)
の出ざるこれを。鍼(ハリ)のごとくにもつてこれを。竹木刺の類をも治
せるものもこれ一家の秘方也。これハあたりふ平穏(オン)なる品ゆえに
利(キヂ)まじとおりふそのくやうなれども不思議の効あるこ
とあり。その他衛茅(ミヂキ)の實鳳僊花の實なども効ありとそ。
いまだ試ざるべき酒にて用ふべし。

火彈ふて火傷をしの手當の事

火彈(ダン)にて火傷を冒(カブ)り。火藥鐵瓦などの粉屑(クダケ)あらバ。鍼
(ウチコミビ)の竹篦(ベラ)にてとるく挑(カヂ)出し。水疱(ブク)ハ鍼にて水をとりて後ま。
海綿(ウミワタ)にて湯ふひたしてこれを用ゆ。血を拭(ノゴ)ひとるべし。血出て止ざるハ前の
ごとくふ洗ふべし。
後ふ鷄蛋油と木綿ふ浸てこれを蓋(オホ)ひ。上にまたこれ
木綿をまくべし。頭面の火傷及金創ふもっぱらふ繃縛(マキモメン)の
簡便ふてこれを圖ふ出しこれまバ須(カナ)て心得おくべし。

毒煙ふあるものを療ずる事

毒煙ふ中りてハ、そ[illegible]神識昏冒身體麻痺して
ものゝハ先紙條にて鼻孔をふさぐべし。嚏をとるべ
し。これ煙ハ必先鼻より入て頭腦を犯すを以て也。故ふ初より鼻ふ綿絮をハ
紙をもみて鼻穴を塞ぐべし。毒ふ中りたるを免るべし。
嚏藥ふハ胡椒を細末して蓄ふべし。相州箱根山ふ
土人の嚏草と呼ものを生ずるを一種の舌交藥なり。
試ふ此物を内服するまゝ或ハ吐を催すハ身體麻
木を發するものの病ふ用ひて効あるべきなり。
もしなれどいまゝ詳ふをゝ嚏をとるふハ他ふ勝
まさる能ある物なり。嚏をとるを後嚴醋を口鼻

へ深くうけ。ものハ内服させべし。人乳汁尤効あり。胡麻
油を多く嚥しもるもよし。桃仁なく毒烟を解するよ
しとなりふも油ふ毒を包攝する効あるゆゑなり。故
ふ杏仁を代用してもその効ゆゑ同し。桃仁杏人を
用るふハ泥となるまで研末して服しむるなり。（壓方ふ杏仁を
用ひて喘咳を治し。桃仁と用ひて蓄血を
治するも其原意ハ類似なるゆゑなり。又明礬の細末ふまぜて
解するふをもいとよし。人糞及人尿もまたよく毒
烟を解するものなり。毒烟ふ青蜘蛛・砒霜・礬石の
類を用るといへどもその製法種々あまたなれども。火瓶中の
臭瓶ふハ安善那・硫黄・馬蹄刮・屑・樟腦などを用るとい

その臭きさまくい惡厭べきものゆゑ
らぬことなり。ゆゑ毒烟とみるべし。速に地に伏て
土沙を口に含み地氣を吸ふべく毒氣を避べし。もゆて
煙は昇るものなれば、やく地に伏べく口鼻に觸ぬやう
ふせることなれを避るもつともよしとなす。
昔武田信玄の敵に射るところの鏃と體の中に殘り止
るやうにしるを咱須をしらしを
東照神君きこしめして、武道の本意にあらず。
不仁の甚しきものなり。彼はその主人の為に我に敵す
るものにはこれその主人に忠臣なれば、ものを

防ん為に射を突ものを止ることを得ざるゆ
ゑなり。然るを鏃の肉中に殘りて後は惱ものなり。
にをむるあまりに殘忍なることなりと仰られしとなり。
然るを禽獸に均さず戎狄がこの毒烟を製して不辜
の衆人を惱ものなれ天の憎ものなるべし。
彼がこれを用る毒に中りしときの用意は知がたんば
あるべからず。我邦人の好んで摸べきにあらず。
もつて戎狄の邪巧悍惡なる性怯して死を畏るより
百慮千思して、くはだてを火攻の具をもつくり制
したものなり。我邦人の苦戦毒逐迅速に敵に迫り。

こゝを殺して而後ふ止む。沃嚢の勇威と餘所ふして。
こゝらの事を學び。劒首銃革具足をとりこゝにそゝるハ。
全く一時の迷惑(マヨヒ)なり。よく思慮(シリヨ)をくゝるべしと。

金創の心得の事

金創(キリキズ)ハそべて速ふ清水にて洗ふべし。灰汁もて石灰を水ふくさゝてたゝるを結ゝて濾(コシ)るも用ふべし。
さる外科ふこゝを金創の水藥とゝして秘傳とし。
ゆ。しがその後西我の發明ふよりて水と用ゝることふ
なりしなり。往古ハ燒酎をのゝ用ひゝるゝを燒酎を
痛強くして堪ゝがたきゝバ代るふ石灰汁を以てし。遂ふ

ハ水を用ゝることふなりしなるを。燒酎を用ひんよりハ。
生醋を用ひゝるゝもよけれバ。ふさゝ痂ならバ用ひてよし。
金創ハそべて部位と淺深ふよりて。治不治を決(サダム)るふと
おゝらいづれふもなるべく血の多く出ぬやうふなるゝ肝
要なり。もし血の迸(ホトバシリ)出て止ざるゝて。動脉を斷(タチ)切ゝるゝ
なるゝバ。よく洗ひて後。血の迸(ホトバシ)る血管(ケツカン)を尋(タヅ)ゝ。その廻の
肉を切ゝ。血管を曳(ヒキ)出し。曳出ふハ鑷子(ピンセット)を用ふ。糸ふて繋(クヽリ)ゝ。
血管多くして繋ゝがゝハ。烙鏝(ヤキゴテ)子ふて燒ゝ管端を
塞(フサ)ぐべし。故ふ金創を治ゝるふハ。必此等の器をも用意
なゝべゝ。ゝこゝるゝまゝどゝ。もゝれハ醫師の職(シヨク)ゝて煩(ワヅラハ)しゝゝゝバ。

あり合鐵器を火に焼赤くして當ることも心得てよし。
また金創を縫ふことハ。さしてむづかしきことにも
あらず。世に名ある外科にもこれを行ふハ希なる
ことゆゑ。さして巧者に熟錬しある者とてもなくそれ
巧拙ハたゞ心の平不平によることと知るべし。ゆゑに武士
を嗜ふかき人ハ金創鍼を七八本ハ鎧櫃に入おくべきなり
べし。糸ハ麻よりハ木綿絲を用るがよし。これを縫
にもあとさき中と次第して縫をよしとす。片くより
縫ときにハ末にあまりて一面の皮にすることが出来て愈
て後看好のよきなればなり。裁縫匠のかけ縫をとする意に
よりて。心静に縫ときにハ何の子細もなきことぞのみにて。
決して傳授秘訣のあるにハあらず。よく縫ふるあとへ
油を少し引き（緩和膏の片脳うすきを用ひてよし）魚膠膏あるひハ鎹をもちゆべく。
（鎹といふハ鶏子白を木綿に浸してするなり。鶏子白をとるにハ上下の尖へ小孔を穿ちてくちより吹ときにハ白先出るをとり分て用ゆべし。）
その上へ酢木綿を蓋ひ（酢木綿とハ布を畳て酢に浸してするなり。）裹帘をて
纏し。夏月ハ膿易きものなれバ。そし痛あらバ解て
更べし。よく手當をすれバ不日に愈あり。そのゆゑそ
の間ハ食物の禁忌を厳し粥を食ふ。壮實なる者にハ
輕き下剤をと與へて。大小便の滞なきやうにするがよし。
戎狄の鈍刀にて抓破されたるごとき創傷を蒙しも

そのハ水ふく洗ひ、後ふ、密陀膏を貼おくべし、魚膠膏
ふくもよし、創處大なるハ、鎹をあく、醋木綿を蓋ひ、
累帛をべし、血出ること多きふハ、槲耳をあて、木綿ふ
てまくもよし、手の動脈ハ肘より指頭へ流注、足の動
脉ハ股ふ下りて趺ふ及ぶ、もべて金創の血出く止うぬる
ハ、そよ動脉の流注を乗るうことを布ふく紮て治を施
もべうり、その事を忘るべうらず、

血留の藥れ事

尋常の血留ふハ、生石灰を細末して、鷄子白ふく煉た
ることを日ふ乾し、再極細末ふく篩さることを用ふ也し、

よく血を止ることのなきときを、灰末創口ふ入ることをハ、
膿を釀こと、もあきべこれを用ることを、灰末の創口ふ
挾らねやうふもべし、爐灰をもく血を止ることのなれ
ハ、もし用んとならべよく細末し、篩く後ふ用ふべし、
馬勃俗ふおこりぶけといふ物もよく血を止ることふ
き品なり、竹籔の中なべふ生だることのふく藥舗ふ
あり、こもてらをを貯おきて用ふべし、もうなべら槲耳
の血を止る効ふハ及びべし、槲耳ハ槲の樹ふ生だる
蕈耳なり、その質柔もく革の如し、外ふ被ることる硬
皮を去く、槌ふくよく打て軟もく貯おき、創の大

小小應じく截て用ふこれを採るハ夏月とうとく榆の木に生ずるを榆肉とそを榆耳ともいふ支那人ハこれを食ふといつり・こまもちゐ代用をなしまた海綿を火ふ熔しまた蠟ふ投じ絞く創口を覆ふく血を止るなり。こまもちゐ心得おくべし

金創の心得ハ事

自然ふ受得たる人身の機開ハ奇妙不思議なるもはなて一切の病ハもと人の身體ふ固より無そなの・そのなれバ邪ふあるを毒ふなるを必ずまと排ひ除んぐるあふ起ものとふろれそのをさして病證とらひろれ証ふ應じその力を

扶て藥石を用ふ鍼醫術の本旨とそこを自然受用の病を治ふる機開なり・今金及創傷ハ皮肉と故のごとく合ふく血を多く出さねバ一時を過ぬまたその損傷ふるるハおのれと接續く氣血を循環し切断ふる血管筋膜もおのばらふ相合く自然ふ舊ふ復ふるべき分なるをもとも疵大ふして合ごとふ止ことを得ざるして術をも施ふるべきの理をよく會得しく血を多く出さねやうふ止ふるべきバ大槩の疵ハ縫ふぐふ・よりぐ・繃帯のく小く治ふるべきバ武士もよくこの事を心得て互ふその死を救ふ庵ごとふとハこれ忠臣の用心な

るべし　伊勢平蔵が説に生柿熟柿白柿ともに産婦手負等に堅く禁ずるは血とくるを物ともせざる人は鎧の小手草摺臑当などの裏に柿澁を以て染てる布を用ふるは軍事に疎きゆゑなり金創ある人柿澁布を身に近づくるは血を吸出して血止とすべし　武具に固く柿澁をひたすべし　また柿澁を以て製したる器に蟲を生じくるべしと　ゑぞうの著ところの舶艫訓といふ書に記したり予いまだ試ることなかれども因に此ふたつを載て人くに示すものなり

閃挫の手當の事

閃挫とは骨節の脱臼したるを早速療治をなさば藥餌貼ふを慰ふをわかつべし速に舊に復して運轉自在なるをのぞむべし此事は尤心得おくべきことなり骨節と舊に復する理を辨知ときは脱ことも亦知らるゆゑに手あるべし敵と擒にむかひ心得おきて大ふ

益あることなり骨節が脱臼して狼狽まどひちふやうの部に腫あらばゆゑにふたつをつくるにも餘計の苦痛をなさるべし骨節はいつたる狀にて接屬のことを知ときは旁ある人に教てさとすべし即坐に成得べきことなり骨節の機開は悉皆臼を以て接屬するゆへ大小形狀に違はあれど機開の趣は同一樣なるものにて閃挫はなるべが脱出て臼の外へ出るを筋はおのずとそのまゝに引よせて緩ぬゆゑに外へ高く出るに骨關は齟齬てあるなり故にふたつを順にふたつに力を入て曳延して齟齬

たる處を脱ることハ延たる筋がおのゝを曳つけて、そ
の白へ容て舊ハ復たるなり決してらるゝことなりこゝ
そのハあらず、この事とよく會得ゝゝバ接を脱しも
自在ハゝゝるものハて、たゝふの勞も術をゝゝものなりく
あゝりハ為易をゝことゆゑ正骨科ハこれと秘事ハ〳〵く
妄ハ人ハ傳へぬやうハゝゝるハ外ハ伎倆ゝゝがゆゑなり
然るを素人ハ骨を接〳〵くバ必ゝゝゝとり懸て接その
とれりゝゝ、その實ハ人為の曳弛と自然の牽縮との二ツ
の外ハ術を法もなゝゝきバ二三次も行ふてゝゝきバ確ハ自
得をゝゝゝこのゝり故ハ正骨科も接ゝゝゝ直ゝ

愈てハ世渡りハならぬゆゑ私ハ酒と糊とハく藥末を
和〳〵く皮上ハ貼ゝゝゝゝ、この二品ハく膳理の氣を閉
て腫の散こゝ遲く愈ゝゝゝゝハ〳〵ゝゝの日數を歴る
やうハ〳〵く利と貪る至く拙陋を所為のゝゝり、そ
べて酒ハ血を凝結を醋ハ血を融釋ゝゝきバ世の正骨
科の用る酒と糊とを以て和〳〵る貼藥ハく酒糟ハく煉
ゝる鉄烙劑ゝゝハ皆相表裏〳〵る所措なり故ハ打撲
閃挫の腫あるゝゝハ醋ハ片脳少許を投大槩二三
温め布ハ蘸ゝく慰ゝるゝゝいゝる腫ゝゝも二三日を
過ゝバ散て舊の如くハゝゝこの趣を會得

たゝ
ゑ

打撲ふ〳〵即死〳〵たるを救ふ事

頭額胸肋脊推腰髏たゞをと打さるハ部位ふりて即死
たるゝことあるべし必試ふ肩井の活法脊椎の活法臍
下の活法をつゝく行ふ〳〵みるべし（さゝわゝり柔術家の中ふ死活券法を傳るものふさす）
りて甦生たるゝものあるべ共たゞちふも肩井の
活ハ頭腦へ近く徹るゆゑふ効速なり息出ざるとてその
まゝふ棄おくべからず いづれも平常心がけて死活
の術を傳る券法家ふ學びて心得おくべきこと武士た
るものあらず人の臣たる醫師ハ心得べ不虞の用ふ供んとなりふてその職ふ合ふもの
とそなりふべ〳〵（この券法のあらましハ後ふ記ふ）

骨を折たる手當の事

折易きハ肘臂股脛の骨なり こゝを痛むところを引
立させくるゝときふハ必撓て幽ふ音がするゆゑ折たる
處ハ慥ふ知られたるなり さてその處ふ腫あらば熱き醋
にてよく慰むべし 醋ふ片腦と多く入るべし 密陀膏を布ふのべて
ふく纏く醋木綿にてその上を包み圖ふ出〳〵竹簾
木の薄板の巾狹きもまた代用ふべし を當てその上より裂たる木綿にて堅
く縛べし これを速ふ療治ぜばハ二三日を過ぬまふ

おの〻と接續く素ふ復もとこと駄くづきらどのその也。
さまでもちうく愈合ちくハ皮肉より遲きものなれば。
半月乃至一ヶ月ちぐらで折ける方の手足を使ひぬやうに
意を用ふべし。且両三日間ちうく変てぬき木綿を
も仕なふなべし。さまで股脛の骨を折たるも小便も
ちびく通ちるものゆゑ。士卒などの輩ちも便當佛と
いふて。桐油ちく造ける佛ありてまふ瓢覃の底を切
てるを逆ふ繋つけおきたるとき小便ハ自身ふ
て小便なきくなり。そもちらをまふあるべバ竹筒の節
をとりてるを以て陳屋の外へ小便の出るやうふした

るをあてがひなべし。ちく簾の代ふ黄蘗の皮と熱
湯ふ漬おきてるを用ふべ。大ちるものふまど厚
き皮ならばなど二枚ちども重ねて用ふるべし。

暑ふあてて悶絶をんとせしの手當の事

暑ふ中りて悶絶をむとする者ハ。なるべく山陰ちく樹
樹の下ち風の通りく冷き處へ負ゆきて。先生姜の絞
汁を多く嚥ちべし。水なども多く飲しむべからず。もと
暑氣ふ中るとりふハ壯實ちく血液の粘稠ける人う。
ちく虚弱なるつづきふもあき平常不養生ちく
病ある人ふ多きものゆゑ。ちまで暑熱ふ堪ずく。

上衝し腹氣心下へ迫て昏眩をなすべし其腹氣
う下降とき小ハ速小治をなすうる患なくしく
寒暑小堪らず身をたゝんまハ平常小酒色小耽こ
となく食事を節して日く灌水一息を調るふと
を心がけるべし人の臣たるそのく身體ハ固より
それ主人なる預たるものなるべきを我物と思ふ
べく心のまゝに身を持それ大なる不忠の人なるべ
しく己小顧て慎を加ふべきなるべし
暑熱小中りて昏眩悶亂する者に熱土燒瓦を臍小
あて慰とゝろの法もあり熱湯を布小蘸て臍中

少腹を温るなるもよし臍中及臍の両旁の天樞小灸
もまたよし内服劑小ハ硫黄消石等を良とされ
バ鐵鉋の玉藥を水う湯小うきて服そべし拊
水術として冷水を頭小拊つけるやうに多く灌ぎとる
ど尤効あり世間小中暑の藥として香薷散五苓散な
どの類を用るゝ後世醫學の本旨を失ひるるかゝ
る藥を以て暑邪を治ることおのひ過てこ
れらの藥ハたゞの陳中へ持ゆくハ無益の事なりとう
く陣中なるの用意ハ單方にて簡便なる劑とし
とに次小載る建中散ハ一方小して感冒中暑食

傷霍亂・痢病・および胸腹痛・疝氣・積聚・ふ用ふべ
きものなれば、これを用意し、たくはふし。

凍死したるを救ふ心得の事

凍死したるものは、その身體ふ新汲水を夥く灌うけて、關節を運轉し、惣身を按摩して後、雪の中へ埋め、ただ頭面ばかりを見はし、口を開きて息をはなく吹入る。時ふ藁生をそのあとこの息を吹入るふは、壯實の者をしてうるぐ吹入さるべし。そして息出さるば、直ふ雪の中ふり出し、醋を多く温めて、頭面と惣身へたてふ吹うけて、再身體を摩擦し、後衣被絨厚くし、枕を高くして右を下にして、横ふ臥ぐし、敷もその上ふ藁藁を重ね、それ上へ臥しめ、風の透らぬやうふしたるがよし。凍死の一日夜を歴たるものは藁生したるもあれども、死したるものもあるべし。ふて、うち棄おくべからず。地を深く堀て、その中へ入れて活るようをもいたり、いづれふも心を盡し事をとくなすべし。人を使ふものは用心なれば、このものの愛憐の情は外寇防禦の最上第一なるべし。

溺死したるを救ふ心得の事

水ふ溺て死するそのハだやくうれ衣帯を解き髁體ふして両脚をとり逆ふ引起して両脚を吾肩ふうけ溺するもの、腹を脊ふ當て身を前へ跼めその腹を吾脊まて按やうふして歩行なぐら水を吐出さすべし水を吐盡しする後ふ脊よりおろし新浄衣を襲を帯をゆるく締て蒲團の中へ卧せ先口中を開きて土砂まどの内ふあるをよく洗ひとりて鼻の中まぐさきたる紙を以て奥まぐをそよく掃除しさて口を再開きて鼻ふ嚏藥を多く吹入るべし嚏藥ハ胡椒の粉又ハ菅根の嚏草あるひハ皂莢細辛まどの細末と用ふ潔用意ちるべし

とりふとうを大指と次中の三指ふくつく掴て筋をぐるりくと按轉べし拳法ふ肩の法とつかいまたり さて脊推の両旁腰髖両脚まぐをも盡く運轉し揉やうらげて心下より両脇腹中までをそよく按摩し再ひ肩井をつく撚り脊の五七椎の邊を券てもくふ打脊の法とりふハこまたり まくをや鼻中を紙ふて掃除し嚏藥を多く吹入く試むべし そし嚏出るときハ忽蘇生るまばるりそしうくまぐふしても息出ぐるときそのハその地を溺する者の體を容らるまどふ堀底の土を柔ふうき起し堀出しする土砂を穴の四方へ築立穴の中ふ薪を

つゝ火を燒く地下すぐ火氣の徹るゝほどふしゝく後
ふ火をゝく消穴の中をうさなゝらし築立てる土砂
をゝ柔らゝてけく溺者をうけ穴〳〵容色頭面バうう
を出し四方より築立く熱くなりゝる土をゝき入く
ゝばらくおこさゝとりく嘘藥を鼻中ふ入又ハ口中う
醋を吹入ゝゝ試むゝし支那の昔魏の將ふ呉
起といゝ色ゝゝ士卒の下なるものと衣食を同うし士
卒の疽を病しゝをく膿を吮しゝふバ上古ふ瘡瘍の膿と吮ところの治法なり
しゝゝゝそれ母其父も往歳疽を病しゝを呉起が吮て治
をし恩ふ感ゝく軍ふ死ゝうしゝふバ子もまゝく為ふ

死んゝとて大ふ哭泣しゝとなりゝうき切要なる心得ふくと
うく權威のゝゝゝゝ心より人ハ服さぬものなり肥後守
清正の息加藤忠廣ゝの己ハ力あれゝうしゝとれもふゝり書
鎧二領重袈裟て軍ふ出なゝ怖ることハあらゝじゝとゝいしと
飯田覺兵衛ゝ聽く先殿ふハ鎧一領ふく數十度の戦ふ
つひふ手負をゝゝひしゝゝゝゝゝ死生存亡ハ皆天命ゝ
て人力の及ぬゝゝゝゝ國中の民を撫育し諸士をゝ
く懷ゝゝゝゝふゝ三軍の物の具ハ皆大將の身ふ
袈裟着ゝゝと同しゝゝふく誰ゝ鋒先を爭ふ臣ゝカ
を好ゝゝゝゝふゝ然べしゝゝ存ぞぬゝゝて先殿ふ

いうそかくまでふ劣うてふそのことて大ふ嘆しまこと
實ふ士卒までも中心より誠ふ服そうふあらねば真の勇
氣ハ出ぬそのそれバ諸士をとく懐る仁愛こそ大切の心が
けなるべきなり仁者ハ必勇ありといふ古人の誡と思ひ敢
死乃操を過らざるならば外冠も豈畏るふ足そのな
らんや

氣を養ふて歛と壓力を生ずる事

大氣ハ天地の間ふ充塞するそのあく昔ふを地ハ大
氣の之を擧るるをといひて凡天地の日月星辰人畜
草木一切の物ハ皆この大氣の中ふ溶く一ツの塊とな
しるるの如きそのそれ然しくくこの氣ハその間を往来
運轉して止ことなく時としてハ盈虧屈伸ありそれ盈
虧屈伸の間ふおのづからある數理を具へるそのの
たるるのゆるふその天地と同一體たる人身ふもまた
同く盈虧屈伸ありて天下ふあるとあらゆる物ふを
ごとく此數理を具へるる。此事ハ子ゞ養生要畧養氣説の等ふ豫記しおきたり。
氣の此身より張出しく身を衛護るそのを衛氣とふ。
天下國家ふハ天下國家の衛氣あるごとく同書ふ論じたり。ふの衛氣ハ張るるハ人を制し縮と
とるるそ人ふ制をるるそれ大ふ張出しるる時ふあるり
てるそ刀劍をこれを斬ことを能ハぬそ矢鉋も之を害ずる

さとを得ざ鐵千石城ふ邊ふ優る不思議の力用あ
るそのあり昔胡元の忽必烈ぶ十萬の兵をさ〜として
筑紫ふ仇を〜時河野通有ハ小船ぶ二艘を以てそ
の中〜艚入り帆柱を倒て梯子となして胡元の船へ
乗移り敵の大將を擒ふを〜も壹岐對馬等を攻取ら
き味方敗北を〜を憤りその大氣を張出〜るよりく
綽のふ勢を以て大功を立〜なり朝鮮の役ふ加藤清
正ハ蔚山より二百五十餘町を隔て西生海ふ在城セ
しが蔚山の落城近きふありとそくとひとしく七端
帆の小船ふ從卒をづうふ七十人を乗をく明兵四十萬

騎の陳どりくる間近く押行〜ふ敵よりも射出を矢鉋を
雨霰のごとくなるを事ともをず易くと蔚山城へ
乗入〜ハ〜るを清正ぶ義勇の大氣ぶ干城となりて四
方を衛護〜るよりて大敵も之を害よることを能はぐ
矢鉋を中ることなりしかるに藤堂和泉守高
虎ハ三艘の船を以て朝鮮の大船數百艘の中へ乗
入〜敵の船十餘艘を乗取〜ハ清正行長などの
なぐく大功ありしふ勵まされる憤より此氣を大
ふ張出して大勝利を得〜なりまた有馬修理大夫
晴信ハ波爾杜瓦爾の大鉋三十六挺ぐちの軍艦を小船

三十七艘ばかりとり圍こゝる時敵より夥しく火鉄砲を打
出をしゝぶ一つも中ることなく追くふ船へ近づき遂ふ
鐵鑠鈎繩を以て船へ乗入る三百餘人を鏖ふしゝ
しゝふ有馬の手ふ少々死傷絶ふ千六人なりしゝ
聞えし又台灣の鄭森ぶ麾下なる柯全斌ハ小船を
以て和蘭の軍艦十五艘を逐退けゝる類し皆この勇
猛の大氣を張出して敵を壓ところの力を發しゝる
より大鉄火攻を避て身ふ中ることなくば壓を
怖ぬ心ふゝりしハぶその時ふ臨る機會を得る
大將ハ果斷なるそのなるゝ色て此氣ふハ不思議

の力用あるゝゆゑふ遠しゝいへどゝ一氣の感應あり
て彼を此より壓ところの驗あることを手近く辨へ
知んふゝ鳥銃を打ふ筒ぶ丸を壓て向へ進むやう
ふあれバ放ちゝる丸の中り必強く筒ぶ丸と別きて
後へ引やうふなるまぶ貫く力弱てぶゝとゝふれ
ゝり觀得ゝるゝとゝふあハ心ふ誠ハ神を
感ぶしむゝるゝ己ぶ德を修て有苗の夷を降
參さゝしゝぶこの氣ハ感應の邈ふ數千里の外ふ
及ぶしゝゝゝとたゝ創傷をゝ
ふゝりゝゝゝゝゝそハ身の衛氣ゝふゝしゝゝゝ

ちふに死ぬものあらず。文化の砦草に血止の藥として出るを茯苓・葛粉に辰砂を少し入て桃花色にしたるを舌の上へのせるなど此等の物ゆへで血を留る効あるべし。そは効あるべしとは止るといふこの氣をたづむるにあることなり。もぐて周身の氣を上弔ふるうちに出血も止ぬ。その創をうけても力抜て働に出来ぬものなれば。さて大將士卒もぐもこの正氣を養ふうちに勇威を出運命を保ちのうちにとくとくたりふべし。調息の術八事行ふ事を觀得せんあの法にしたがひ延壽帶の製ある所以なり。室直清が說なり。

武士ゆ武藝を修行するにいつまでもかはることなれど武運をうるまでゆ武藝を用ゆるまでゆ天死とすることあまたゆ武士にひとしく武運の稽古をするうちに武運の稽古とは國家祖宗の大恩を一日片時も忘ることなく身を粉に碎くも厭ぬ心を養ひ天理に合て武運を盛ふるものなりと示せしに即ち氣を養ふところは根本にして尤至當の確言なりとて方今國土の勇威大に興べき氣運變革の時にあたり唯此武運の稽古に炮術操練に大に優さ

る切要の事件なるを為るとおりつゝいらぎる老の
咩嚏なるべし。聊此ふその義を辯ぜしなり。

愈創水

緑礬　明礬　各百匁

右二味、細末、水五升を入て、火ふ上をよく烊解して、
火うつ下し、陶器にて、樽に入て、陣中へ持ゆくべし。
用るに臨て、布または撒棉絲ふ浸て、創ふ貼るべし。
創浅きその、水ふて血とよく洗ひ取たるあとに、
手早く此藥を畳布ふ浸して貼るべき木綿
をもそなへば、大験なり。損傷ハ速ふ愈るゆゑ、次の
藥布などを用るふおよばず。故ふ此藥と前ふ
りくる石灰末、槲耳、馬勃等ハ、陣中ふ多く用意
するべし。

鷄蛋油

鷄卵　五十個　胡麻油　二合

右鷄卵の皮を去、播盆ふくくとくもり、徐々ふ
麻油を加へ、相和し用ふ。鷄卵ハ白を去て用ること。時ふ臨て製するハ危しとす。

密陀僧膏

密陀僧　五十匁

右密陀僧の細末を油ふくく煉合をくく後、水二

合を加へて吹上ふ上を手を止めず攪煮ること
と半時ばかり少ばかりを水ふ滴くらゐ程を
ゝゝ火より下しく蕃瀝青の水飛しるる
その三十匁を加へく攪て再び火ふ上をく
混和しく粘稠くなるところを下し温たるに乘
して布ふ擴く後に乾くを待く卷おくべし

魚膠膏

魚膠 百匁　密陀僧 三十匁

右先燒酒五合を以く密陀僧の細末と浸おく
こと二日バかりして滓と濾去りて魚膠ふ
水一升許を入く火ふ上をくよく融解し水氣の
減ずるふ隨く密陀僧の燒酒を加へく膠飴の如
くふふりくるときふ火よりおろし布もしくそ
結ふのべて貯おくべし俗ふ上透膠といふものを
水にて煮てを紙ものべく即効帝と称しく
賣ものはこの畧方にて用ふべし

緩和膏

白蠟 六十匁　胡麻油 二合夏ハ一合を用ふ

右白蠟を薄く斷く麻油と火ふ上をく温め油
の上面乃動くときて蠟を入融解するときふ火

ふくを下し、器ふ入く貯ふべしふくり、ふくをふ片脳三十、
灸を加て用ふべし、おの膏よく胗脈を治
す、故ふ水戰不龜手の藥ふハ、ふまき茂大ふ製して
用ふべし、蔗藥ふどの類ふて、脚底を傷めるふ、ふけ油茶を
煙管の火皿ふ一ツ程ど入て火ふとりて濃し入るべし、
鷄蛋油を用
ふもよろし、

建中散

乾姜　良姜　桂皮 藥舗ふ東京厚皮と呼もの、麁皮の味濃くして辛味なきところを斷去て内の辛きところのみを用ふ、一斤ふして　唐木香
丁子　唐縮砂 各等分　唐呉茱萸 微炒、減半、
右七味細末し、一貼ふ二錢許より三錢ふいたる、

熱湯ふ點服ふの藥、感冒中暑、霍亂、下利、疝積、一
切ふ用ふべし、

緩下劑

唐大黄 百錢、充實ふして色黑くして
右水三升入て一升ふ煎じ、滓と濾し去て上好の
硝石五十錢、白蜜百錢を加へ、重湯上ふ煮て飴の
ごとくならしめ、器ふ容て貯ふべし、夏月ハ日数
ふれバ柔になるふり、蜜ふ代ふ砂糖を以ても
るべきも可なれども、一度ふ一二錢を用ふ、

肉刺藥

赤螺殼（アカニシノカラ）焼末（やきもの）　半夏

右二味等分細末し先鍼ヶ小刀にて刺（サシ）る水を出し此末を米糊ふ和し紙にのべて貼おくべし」

以上八方ハ簡約にして俗人にもて卒（ニハカ）ふ制表（セイヒヤウ）をなる方を撰載（エラミノセ）てるものなれば平常ふ製しておきて不虞（バカ）の用ふ供ふべし

馬乃病を診察（シンサツ）するふ八候（ハウ）とふとあり八候とハ尿屎食眠眼息舌毛腹なるの説予ガ梓行をる廐馬新論中ふ見えたり騎馬の士を常ふよく心得るときハ倉卒ふ馬の斃（タヲル）ることをなるまじ大ふ益となる

ことなるその書ハいとなる薄禄困窮乃士なりと雖も費少くして馬を飼得べきことを自試こころる事件を懇（子ネンゴロ）ふ記しるまだ志あらんその人此書ふよりて馬を養ふことを心ゆくべし

救急摘方

木綿を
裂ふかくのごとくして
さくろう。
両耳ハのぞきもちて、
骨を折るときの
簾をくくあて板を
あてふ用ふべし。
金創の裏木綿ふ用ふ
ふハその部をもちて
廣くさと狹くさと
あるもとど大くハ
六ツ七ツふ
さくべし。
此図ハ往年著をところの
病家須知ふ出して、
くくくく記しるす
ことをみべし。

この耳ハ巻木綿ふハ用ひず。
後の接骨ふあぐる
簾をいむふ
つくるなり。

撒綿絲（ホウシモメン）

両巻

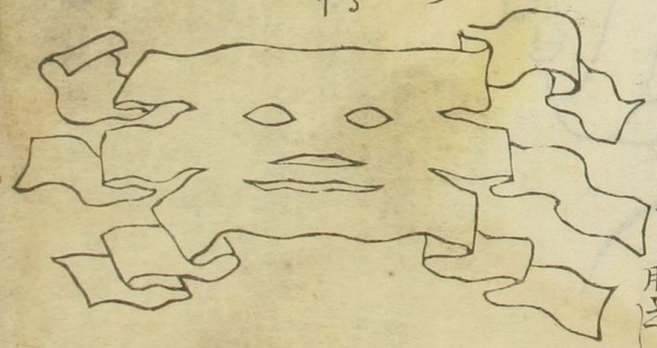
片巻

やつしのくち
さまぐちあしど。
くくふハそのうち
五種の形を
出をせ。

主屋て晒木綿とくふ
ものを用ふべもし
あらうじあ裂て、
くくのごくくちを
鐵槌ふ入おくべし。

壓棉（アテモメン）

火傷の
面へ
あてる
布



愈創水。
くくハ醋ふ浸て、
金創へあてる
ともんなかに常の
手拭をも用ふべし。

後

頭部ハ火傷ナドニ
金創ヲ得タル
ソノヲナジクトモ
ヨモギアリ。
ヒフ三ノ状
トラヘドシテ
ヨロシ。

繃帯ハ頭部ヲ
ツツミヲサムルコトヲ
心得ベキバ外ハ皆
知ラズ。ユヱニ頭ノ
真ノ繃帯ハ病家須知
六ノ巻ニ図ヲ出シ
詳ニ記シオキタリ。ヲ
ミルベシ。ココニ出ルハ
皆ソノ略法ナリ。

木綿ハ二ツノ
ゴトクニフサキテ
ヒトツヒダ。
手拭ヲモ
キフヒラヒラ。
ココニモ常ノ手ノヒラヒト
以テフヒラヒ
ヒラヒアハスル
ココヲ
示セリ。

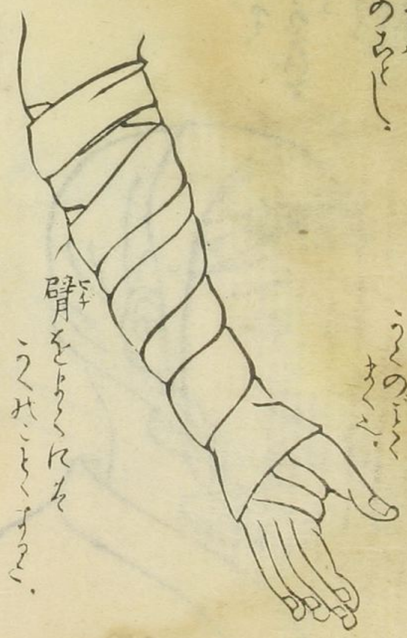
イノ印ノ布ヲ
額ヘアテ、後ニ
ムスブ。
ニノ印ヲ前額ヘ廻シテ
アゴノ下ハ印ヲ耳ノウシロヨリ
アゴノ下ハ印ハ耳ノ前ヨリ
下クアゴノ前ヘムスブ。

アゴノ下ノ
ヒラヒラ
別ニ木綿ヲ
ココニアテバ
飲食言語ニ
ヨロシ。

大指とくすめるハ、
うくのごとし。

この指をとくふを、
前の六ッセッふさきるを、
まこと二ぶるさきて
中をとるを
まくるなし。

人さし指をとるをハ、
うくのごとく
まくべし。



臂をとくにも
うくのごとくすべし。

足をまきさる
形をさまぐあれど、
こふハ二図を
出して示れり。

手のひら甲より、
五指ともに
まくふハうのごとくに、
ゆびを巾狹き
布をそまくべし。

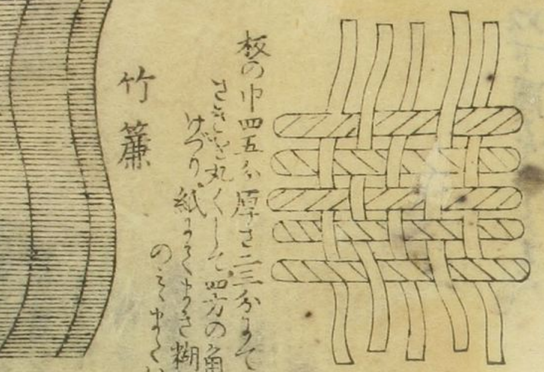
手甲ハ
いさらう創を
うけたるに
うくのごとく
まくべし。

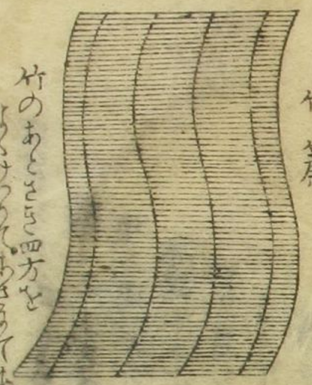
手を麻て裏帛ハ定りなる法あるにもあらず。
その人ハ作畧うて時ハ
まくることとなれバ
緊く縛まバ患者そのいたミハ堪がたく緩くまハ効なし。
緩急その中を得るハあるのみにて事なき時ハ
たゞくまきてそれバ
知らるるなり。

脛のむくふずねへ創をうけたるを。こゝろ
手拭などふて自らまきこんだ水わく
血をあらひわくして帛をかゝて
あて〳〵手拭をくのごとく裂さるを
こゝろよろ前へとりてやきそのうへより搦るべし。
手拭の端を少しききてあてゝもよし。
こまゝ急卒のゝふあてゝ
仕ようなど示すまもなり。
外ハそのきに準じて
こゝろべし。

腹を堅ふ切られて創浅きを。
速にあらくことゝこの状のものを
造へし。左右より創を靨て合せる
やうにする
なり。
こゝくのゝこゝを
こゝ搦るなり。
木綿を
こゝくゝる
なり。
創ふ魚膠膏
まるい
密陀膏を貼て
あて
木綿を
なる也。
この糸を以てくゝる
なり。
木綿の
こゝくゝるを
用ひても
もゝて腹上ふ創をうけたるを。こゝくゝふゝ脛を縛る布の如く。
木綿ハ布ゝふ両端を裂くゝを伸卧しゝ患者の背へ
並べくゝる如くふ。左右よりゝゝてゝぶひちぶひふ
もゝこゝ長き木綿を用ふれバ背へ廻し
ひゝくゝふ患者の體うごきてあ。れバ。
此旨をよくゝろえ。べし。

本文ハ金創の動脈を斷切て血の迸り止らぬる血管を糸にて繋ぎ焼鏝あて焼るぐさりとりるものもこの繃縛を用いて血の四末ハ流れゆく路を断止むまでハ大氏の出血ハ漸ク止るそのゝち故ハ此ニ圖を出してその法の槩畧を示せ





板の巾四五ハ厚さ三分ゆるとあと
ささぎを丸くして四方の角をも丸く
けづり紙ゆるくまき糊おてそゝ裂不綿
のゝちはくハ麻を用ひてあむ

竹のあとささ四方と
よくけづりておきゝてあむなり
この二のゝちあるふうをてこしらへ

此二種ハ折ける骨ふあて
本文に記
ものをみべし

脛骨の折てるハ
上の具をあてゝこゝろ
うくさごとし外ハ準じて
知べし

項骨を閉挫するハ、うく其仰く患者を
横ふ卧ふを患者の肩（両脚とも）
項と腮へ手をうけて左右（両三ど
迴轉して後肩ふあてゝ脚底
以て肩をつゝくおし頭をさぐ
もゝて曳ぐまゝバ舊ふ
復もとのゆり動し
患者氣をとゝのゝもひ
ゝらゞ肩井をつゝく
掴て迴轉し水を
顔ふ吹くゝ
忽ふ氣が
つゝくゝ

以下圖もとゝゝゝ
本文ふ人為の曳弛と。

自然の牽縮（ケンシュク）の二ツのゝふて。
閃挫（センザ）ハ治もとゝゝゝゝことを
いゝるゝその説と會得しく。
図ふ出をゝゝゝのゝと觀ゝゝきふハ。
速ふその術を得ゝゝゝなり。
往時難波ふ名を得しる
西骨科及予が弱冠時（ジャクカンジ）學ふ
ゝし長寄の吉原
隆仙が術今ハ世ふ
名を得ゝ
或人の西骨の
伎を其極旨ハゝ
このゝゝさふひけバ
ゝるゝにゝる。
自然の所為
ゝゝゝゝ外ふ
術ハゝゝゝゝふ
ゝゝゝ下の図ゝ
ゝゝく辨ぜず讀者ゝく
この意を得て理解ゝべし。

肩の骨をくるくるハ。
前は項骨を
たなごゝろをそのゝ状ハ同しく。
りくはごとく足踵を
患者の腋下へあてゝ。
手と下のゝ〳〵引たり。
足踵の腋下を上へおしたものと。
両手の手とひくものと。
一齊ふかとゝまてそ
ひくのこなり。

前の肩の骨を。
くるくるふ
して胸の
うゝ〳〵曲く
ひきつけ
てもうゝる
なり。
まゝて仕方ハ
さきのあれど。
大意ハ
同しこと
なり。

肘骨の関柱を。
その患者の臂を柱に
布にてうるく縛り。

患者の體を
入ふもつとこらくさせて。
ありたふ棒を以て。
その布をかを入る
打ときふハ筋伸て
もちもちうるる也。
これを手法ハ
前ふ同し
くるもバ。
くるふハ
この図を
出して。
曳ときハ
うるものを
示をなり。

前の肘を。
くくれば。
一手掌を胸ふ
あて
曳もぢて
うごかす。

腕骨ハ。
患者の手と
くゝあゝをカと入て
両三次むゝふゝ廻轉して
後ふゝゝゝ曳ときふハ。
うゝゝこれも
廻轉をぢて
ひきても
うゝゝ
也。

髖骨（モヽホネ）を脱臼（ヌキ）する。二手掌を
腰にあて、脛をとりて
迴轉して後ふ。
あとへひくなり。

腫出（ハレイデ）たるものハ。
一人をして足趺（アシノカウ）を
持をて、膝蓋骨（ヒザサラボネ）へ
手をあて、迴轉して。
扶るものと一同ふ。
あとへ引くなり。

膝の骨々。
一人ふ股をそろと持そて。
手掌(テノヒラ)と膝蓋骨(ヒザサラホネ)へあてく。
そろくと迴轉して
後ふ正中ふ
曳ぺろそろう。

足踝の骨も。
手腕を治する法ハ
同じくむかへ
ゆびをしらべ
こゝろへ引て
伸ちぢめ
忽もとのやうハ
なるべし。

以上九圖、骨の状ハ同じ
こゝろぐ皆目の中くぼ
ところ〳〵ゆがめてあるもの。
そひちがひてあるをゆぶ曳のばす
正直小ぢそろのこと。
接骨の極旨たるこを辨ずべし。

隣春園驥貴